一般部門

やさしい眼差しと心配り

【大澤（おおさわ） 貴子（たかこ）・茨城県】

第3回 忘れられない看護エピソード 一般部門 優秀賞

年子の怪獣ちびごんたちの子育て、そのうえ3人目の子もお腹の中で暴れ回っていたころ、私は毎日へとへと。遊んでも遊び足りない子どもたちに、「もういい加減にしてよ」と最後はキレ気味。そんな時、必ず不思議とあの時の看護師さんの笑顔が浮かんでくるのだ。

私の2歳違いの妹は重度の斜頸（しゃけい）であり、生後、何度も手術を繰り返し、母は付き添いのため家を留守にする日が多かった。退院後も、私は母に手を引かれ、妹のリハビリに黙々とついて行くという日々の連続だった。母は妹の首を治すため必死で、家業もこなしながら、いつもピリピリと気を張りつめていた。私は幼心にも、母に心配をかけてはいけないという思いが常に心の中にあり、存分に母に甘えた記憶がない。母がいなくて寂しいと母に言うこともできず、母の前で泣くこともできず、この時の切ない感情は今も心に残っている。

妹の入院中のある日のこと。父とお見舞いに行った時、上半身ギプスで固定された妹が院内学級で友達ができたことや、学級での出来事をうれしそうに語っていた。私の傍らにいた看護師さんが、「一緒に行ってみる?」と優しい笑顔で私に語りかけてくれた。

それまで、何もかも妹中心に回っていた生活だったが、この時私のために、私だけに掛けてくれた一言がとてもうれしく、この一言と優しい眼差しに救われた思いがした。その時、看護師さんは病児の兄弟姉妹の気持ちを私の表情から理解していたのであろう。私は、この後、院内学級を見学し、妹の置かれている大変な状況を理解したのだった。

病人やその家族にまで心を寄せ、優しい心配りのできる看護師さんに出会えたことは私にとって、その後の人生で3人の子の母となり、子育てしていく上で大きな支えとなってきた。病だけでなく、心の痛みも理解し、共感し、寄り添うという看護の原点に幼少時代に触れることができた私は幸せ者だ。